

D・H・ロレンス

— 存在と愛 —

飯田耕作

—
Let me find a few men who are distinct and at ease in themselves like stars.
— The Reality of Peace

D. H. ロレンス

ロレンスが最も重視したのは、Individuality の問題であつた。彼は様々の観念を提出したが、その問題の究極は個たることの究明であり、個を深層の根底によつて彼は洞察せんとした。その深奥よりの individual な燐光を、あるいは白熱の五彩として捉え、あるいは寂光として感受しようとした。しかし光はただそのものとしてのみ輝くものではない。それはたとえいかに極微であっても、外界に照射し、そしてその反照をおのづから受けなければならぬ。その尽きざるエネルギーをそれ自体の根元にあくまで発しながら、外界に照応せざるを得ない所に、光が光としての負荷がある。

その光がアトモスフィアによつて、つねに不安定であり、脆弱であることが不幸なことなのである。たとえばそ

の光度が衰えうすれても、その輝きの鮮明さを、どうして人は保持できないのであろうか。一見自由がかほどに確保され、享受されていると主張されている時代に、何故に人はこのおのづからなる深奥よりの光を、おのれの息吹きによってすら吹き消さんとするのであるか。かかる愚鈍、無知、不遜は、自己の Being に対する無責任から由来するものではあるまいか。

ロレンスが自己に問い、社会に問うた問題はここに帰着すると言っていていいと思う。かかる問題自体は、決してロレンスに特有のことではない。久しく繰り返され、すでに多少摺切れた観さえあると言える。しかし哲学者でも、社会学者でも宗教家でもないロレンスは、奔放な芸術家、詩人として彼独自の直観力を駆使して、これに解明を与えようとした。彼はすべては経験より発するという誠実な信念から、ほとんど生涯に亘る栄光と悲惨の生体験の realization によって、この Individuality を究明しようとした。茫漠として昏迷のうちに浮遊している個体を、その存在の深暗所にまで潜水することによって、これを燦然として明確にしようとした。その直観の鋭さと、ゆるがぬ信念によって、この試みが偉大なる挑戦であると感じられ、あるいは特に戦後において福音とも受け取られているのである。

二

近代のデモクラシイの理念を、ロレンスは信じようとはしなかった。少くとも現象としてのデモクラシイに彼は反発を感じていた。それは個と集合性 (Collectiveness) の二つのファクターのうち、後者に傾斜したデモクラシイである。こうした傾斜を持つ社会には、意志の盲目性が prevail しており、人々は容易に権力のヴィジョンに

眩惑される。これは何よりも人間が、い、弱である徴候であって、その弱い弱からして、そねみ、憎悪、敵意などの破壊的エレメントが産み出される。状況そのものが不穏となる。そこは茫洋としたコモンの平地に立つ陽炎のヴィジョンの世界であり、溟蒙の仮象の世界である。この生命の枯渇し果てる荒野の世界を、不幸にして現実と呼ぶとき、人はやがて襲い来る洪水に溺れ死んでしまふであらう。

この溟蒙の世界の背後に、真のリアリティを見出すこと、これに覚醒すること、ロレンスの言葉を借れば、「意識への絶えざる冒険¹⁾」に挺身することが、混沌の危殆に瀕している人間を救い出すのに、最も重要なことである。この意識へ間断なく偉大な冒険を行うことは、真の勇氣ある者のみによって可能である²⁾。勇氣あるもののみが、燦然たるリアリティの現出に、何の眩暈を感じることなしに堪え得るものであり、また、い、弱の精神たちの矢ぶすまに立ち向い得るのである。勇氣あることは、真の人間の強さを表わすものである。そしてロレンスによれば、人間の強さはアリストクラティックなひとり (Aloneness) によって可能なのである³⁾。

勇氣あるものは、ひとり立つものであり、現象を穿孔するピケルの強さは、ひとりの力の強さであると言うことができる。衆の力の強さではないのである。「神に向っての新しい冒険に乗り出す⁴⁾」のは、真にひとりである勇者によってのみ可能なのである。神もひとりの個に對している。衆に對する時の神をわれわれは信用することはできないであらう⁵⁾。個の根底にあるひとりの世界を究明することが、したがって人間にとって一大事なのである。

三

Individuality が真のひとり、を基盤として成立するという時、それは同時に他との關係において規定されてい

るといふことが、ロレンスにとって根本的な一大事であった。「すべての存在は二重である」といふ Polarity の観念が動かしがたく彼の思想を捉えている。それゆえひとり、孤立ではなく、他との関係によって生きていゝものでなければならぬ。「やすらぎのうちに、ひとりであることは二人が共にいることを意味する」と彼は言っている。ただ関係だけ、係り合っていることだけが、人の個たるものを成立させる。絶対のプロセスが個を成立させるのではない。「人そのものは究極において絶対になり得る」とロレンスが言うとき、それは常に相対の係り合いによってのみ可能であることを意味する。この相対の絶対をつねに踏まえざるを得ないところに個が個であることの困難さがある。

「われわれの Being は心奥の神祕から、茫漠とした Presence の中へ量り知れずに出ていることに依存している。」と彼は言っている。内奥の深い原初的な魂から浮揚して、Presence の世界に身を露呈するときに、存在が初めて真の存在となる。そしてここに現出することは、他との Presence におのれを見出すことを意味する。

「私が彼が彼である他者と並び立つとき、そして私が真に私であるとき、私は一つの Presence をただ意識している。異様な Otherness の意識だけを持つ」とロレンスが言うとき、この意識の異様さはリアリティへの覚醒を意味する。私の前に、at hand に他が存在するという意識に覚醒することが、根本的な第一義的なことである。すべてはここより出て、ここに帰するというのが、ロレンスの根本の観念であった。

魂の洞窟からこの Presence に覚醒することによって、人間の関係が一新する。他者への関係に覚醒することによって、人はおのれの存在そのものを充足し得るのである。他を他として知ることが、おのれの存在へ反映する。その反照なくしてはおのれの存在そのものが、溶融としたものとなる。それゆえ他者を客観的に知る、もしくは他者へ向って、客観的な態度で attend することが必要となる。人は他との共感的な融合から、いわば主観

的な混融の情況から、他を識別することという客観的な働きによって、他の存在を明確にする。ここに分離する働きがある。分離によって他を知ること、おのれと他の間に超え難い溝を意識することである。おのれと相對しているものの、窺い知れぬ深い神秘的不思議なるものを前にして、畏怖と驚嘆を感ずることである。Presenceの覚醒によって投射された燐光に映発された他の世界の輝きは異様なものである。その輝きをおのれに反照させる時に、「自己は拡大されるが如き」¹⁰⁾ 思いがする。ロレンスはこの関係を、聖母子像に感得している。¹¹⁾ 母の膝に抱かれた嬰兒はいわば Objective な、深い異様な、母への理解を持ったような眼差して、母を見つめている。それはイノセンスの眼差しというよりは、深い前視覚的 (previsual) な弁別する目であり、母との溝を超えながらその溝を固定さすように眺めている。母自身も時折半ば恍惚の状態となり、膝の上の嬰兒が、異様な、分離した対象に思われて来る。何かしら終局的 (final) なものが身に起った感じがして来る。この分離の、客観的な原初的な識を所有することが、母を恍惚たらしめ、満足感とともに、畏怖をも与える。それはまた何か豊かに所有していると言った感じを与え、運命的な何ものかを感じさせるのである。膝の上の児がにわかに客観的な認識のものと現われるとき、Presence の深淵を母はのぞきこんだ思いがする。それは内奥からこみ上げて来る根元の喜びであるとともに、おののきでもある。なぜならその時、母は真に何物かを抱き所有しているという感得に打たれているからである。この客観的な識に立って、人は自己の Final な状況を知るに到る。自己の存在のリミットを知り、これを定めようとする。Presence の意識に覚醒して、人ははじめ、自己の限界を知る必要に立つと言えるであろう。客体化された他と向き合って、おのれ自体の Finality を意識する時、人は越えがたきものうちに、運命的な何ものかを感じするのである。

人が自己のリミットを識ること、あるいは自己にリミットを定立することをロレンスは重要なことと考えた。それはロレンスの好んで使う言葉で言えば、「おのれの皮膚の中に坐す」¹²⁾こと、「おのれの皮膚の中に全きものであること」¹³⁾「おのれの皮膚の中に自己を収束 (gather oneself)」¹⁴⁾することである。人はただ存在の茫漠とした中に埋没して、真に自己の城郭を意識していない。それは混融の状態であり、indeterminate な無収束の状況であって、Presence への真の覚醒以前にあることを示めている。「皮膚の中へ収束する」ということは、単に自己の殻の中へ recoil する¹⁵⁾ことではない。自己を閉鎖して韜晦することでは更にならない。それは Presence における関係に覚醒した時の、その目覚めたる自我における、収斂の作用を表わしている。さまざまな方向に逸脱しているおのれをたぐり上げ自己の輪郭に包括せんとする自律的な働きである。それは求心的な強力な力が、根元において自己の中心へと働いているのである。

「この世界にあつて至高なるものは、determination であり、limite である。永遠の慧知が宇宙を網の目に、determination の網の中に捕捉してゐる」¹⁵⁾と Simone Weil は言っている。ブルータルな力が現存在に働いており、人間はさまざまなこれらの盲目な無限定の、茫漠とした力に支配されている。それは内部よりの、超克しがたい主権者のように見え、人は従属に墮して divertir してしまう。しかし真の主宰は極限のプリンシプルであることを知らねばならない。宇宙が Chaos ではなく Order であるとすれば、そこには限定の、リミットの法則が主宰しているからである。渾沌の中にリミットを劃して、その限りにおいて一つの世界を作っていること

が、Orderであり調和なのである。なぜなら「関係の至高の網の目が張りわたされて」(シモーヌ・ウェイル)いるからである。リミットは関係のあり方を示めすものであり、関係の産みだすものなのである。

ロレンスはシモーヌ・ウェールと同様にピタゴラス派の思考に触れてこう言っている。「初期のピタゴラス派の人々は、世に言う宗教的な人間であつたが、二つの第一義的な形相という考を抱いた点で、更に一層宗教的であると云える。即ち火と夜の形相である。……この二つは限定と無限定であり、無限定の夜が火のうちに限定を見出す。これらの二つの原初な形相は対立の緊張のまま、その対立しているということによって、それが一体であることを証明する」¹⁷⁾

この存在を形成する、無限定と限定の関係がロレンスにおいても根本的な観念であつた。無限定である宇宙が、コスモスの Order によって、全一的なものであるとするなら、それはこの無限と有限の相對關係によるのである。ヘラクレイトスの説によると「暁と宵の極限は大熊星であり、大熊星の反對側には、光れる Zeus の境界がある」¹⁸⁾という。こういう宇宙的秩序を考えることが、古代人の宗教的風土を作り上げている。人間の Being そのものにも、この觀念が反映しており、いわば小宇宙を形成している。人間の存在の深奥の Darkness が無限定のままに、有限の中に収束されて顯現される所に、存在の全一性が依存しているのである。真に生命の充足した Being は無限定の限定という關係によって、はじめて可能となる。ロレンスのいう宇宙的人間とは、かかるディアレクティックな宇宙の理法に従つた存在を指すのである。無限定が有限に selfrealize する場が presence である。それゆえ人は他者との關係に覺醒する時、初めて有限化されると言つていいであらう。「翼ある蛇」の中でケイトは獨白する。「人間はリミットされなければならない。もしリミットを受けまいとすれば、おそろしいものになってしまう。……私はリミットされようとしなければならない。もし誰か私を強い意志と暖いタッチで

ミットしてくれるならば、私はよるこばなければならぬ。なぜなら私の偉大さ、私の背後の神の広大さと私が呼んでいるものが、もし私を暖くりミットしてくれる手がそこになれば、私を無の陥穽に転落させてしまうから……」¹⁹⁾この果しない広大さに佇立せんとすれば、そこは hollow floor であり、底知れぬ無の深淵がのぞき見えることに気づいて、人は眩暈を感じてすくんでしまう。この神秘的な茫漠とした広大な世界に、Bang を確立し得る唯一の方途は、存在へリミットを加えることの外にはないのである。

五

ケイトは自己にリミットを加える必要に覚醒して「必要のある限り服従したい」と叫ぶ。ここに服従というのは、対立としての男への服従を意味するというよりは、何かしらおのれに限定を加えてくれる力をむしろ意味していると同様しい。宇宙における無限定と限定の関係には、ウェイルの言葉を借れば「永遠の慧知」が働いており、その慧知の示めす所に服従することによって、Order が成立する。はるかかな星空を深く眺めてみれば、星と星とのこのリミットの関係は人は感得する。そのきらめきと静けさは、至上なるものへの服従がもたらすものである。天上の美しさもここに由来する。なぜなら美はおよそ何ものかへの服従に倚っているからである。

この「永遠の慧知」の働くのは愛の力によるのである。無限定から限定へ向う収束のプリンスプルを作用せしめる見えざる力は、天上の愛なのである。天体のもろもろの部分、混融して一体をなしているというよりは、おのがじし外輪を描きつつ、ロレンスの言葉で言えば星の均衡を保っている所に、慧知の測り知れざる深さがあり、また真の愛のアスペクトをここに観照し得る。Communion は均衡という観念を排除し得ないものだ。

極微の人間の存在にあっても、こうした見えざる永遠の慧知が働いている。ただその見えざるものを感觸し得るかどうかが人間の問題である。人間の喜びや苦しみ、絶望までも、それらが真の値打を人間にとって持つというのは、この慧知を最もよく感觸し得る準備的な基盤とこれらがなり得るからである。それはただ覚醒によってのみ可能である。ロレンスは「人生の土台は悲しみである。これを人生の第一の真理と認めねばならない。ここから出発しよう²⁰⁾」という意味のことを述べ、この土台をふまえつつこれを超えて、「ほほえみと戦い」によって人生を築き上げることを念願とすべきことを言っている。ロレンスその人も苦しみとたたかいの長い生体験に堪えながら、外なる自然、内なる自然との感応になにかの啓示を得んとして来た。その持続したプユリタニックな忍耐は異様であった。彼はしばしば待つことの必要を説く。それは無為の待つことではない。烈しく格闘する生命を内に臆しつつ待つことを意味する。啓示はかかるダイナミックな忍耐によってのみ顕われるものであると彼は知っているかのようであった。こうして彼は「永遠の慧知」の啓示を受けたと、いいである。彼の言葉で言えば「宇宙的意識」に覚醒し得たのである。即ち Presence への覚醒である。

おのれと他者が相対しているという、動かしがたく逃れがたい関係の覚醒は、またリミットの覚醒である。これは服従せざるを得ない宇宙的な理法への覚醒であって、ここに愛の働きを感得することが可能である。限界に覚醒することに、すでに愛の力が働いているのである。何か至上なるものの手が示めす所に、愛の力が作用する。Presence はすなわち愛の働きを持つものであり、愛が滲蕩している場なのである。

主観的な茫漠とした状況から、他者が客観的な対象としてにわかに分離されて、相対するものとして覚醒される時、人は真の Aloneness に立つと言うことができる。そこに愛の力が働いているからである。それゆえ人が真にひとりであるという事は、単に孤独を意味するものではない。ロレンスによればこういうひとりに立つて

いたのは、たとえばイエスであった。イエスはひとりであったが決して孤独ではなかったと言っている。「それは孤独を超えるもの」²²⁾だった。すなわちイエスのひとは深い愛にもとづいたものである。深奥の声に聴従して、ひとりに佇立しながら深い愛に彼は捉らわれていた。「万物のざわめきの中にまがいなしのひとり」²³⁾を感じるこゝと自体、愛の力によっているのである。Solitude peuplée を真に感得することは、逆説めくが人間への深い愛に根差しているのである。

ロレンスの「ひとりであることは、ふたりが共にあること」という意味はここにある。Presence において人がリミットを持つ、「皮膚の中に全きものとなる」ということは、したがって孤立や隔絶を意味するものでない。むしろその輪郭から何かしら溢出する所がある。老樹が自然の中にひとり立つ。その年輪を重ねた樹肌は、風雪に堪えぬいたぎびしい輪郭を描いている。がこれに静かに対するとき、それはまた何という微妙な、柔和な、sympathetic な相に見えてくることだろう。何かしら無言の話しかけをしていると感じられる。エトルリアの古代の絵画にロレンスが感動したのは、心奥より生命が湧出して、急に実体がすり落ちたような、驚嘆すべき暗示的な微妙な輪郭が、あたかもアトモスフィアに流出しているように見えることであつた。²⁴⁾それは生命の根元よりの充足がぎりぎりにみなぎった極みの、すれすれの面である。すなわちリミットが真のリミットであるためには、生命が湧出、充足していなければならない。その時にのみ限定がおのづからおのれを超えることが可能なのである。

限定がおのれを溢出すること、即ち grenzlos となる時、そこよりおのづと発する光芒が感応のはたらきとなるのである。丁度星と星とがおのれを劃しながら、その光芒によって感応し合っているように。この感応がすなわち愛の力のはたらきなのである。Presence への覚醒が見えざる愛のはたらきであるとせば、この感応もまた

その愛のはたらきであると言える。

ロレンスは愛という言葉をきけて、Tenderness という言葉を用いた。それは根元よりの生命の充足によって可能であるという意味によって、Physical Tenderness と呼んだ。²⁵⁾ 肉体のと形容したのは、脳髓的ということも嫌悪したことによる。頭腦的ということは、精神的、主観的、単数的、単数的という意味を含んでおり、かかる愛は人間の生命の深奥に、根元を發していないというのがロレンスの強い信念であった。そして更にロレンスは「真に Tenderness を持つもののみが、宇宙においてひとりである風貌を持つ」と言っている。²⁶⁾ このひとりであるというところが、前述のようにふたりであることを根本において意味している。それゆえ「Tenderness という言葉は、ぬきさしならぬ「二人である」ということを決定づけるために、ロレンスが使っていると言っている。それはあくまでも心奥の、複数的の意味を捉えたものとして提出されている。それが肉体的、肉体的という形容詞を選ばせている所以である。なぜならこれが最も Being に即している言葉と言えるからである。

Presence における相対の關係への覚醒及びその Communion に、「肉体のやさしさ」が働いていることは、恰も天体におけるリミットの理法が、愛の働きとして作用しているのと一致している。ロレンスにとってこれが同一不二であることが根本の信念であった。天体の静けさ、平和は、ここに遍在する愛の理法への絶対の服従から由来している。それと同様に肉体の優しさによる Communion には、沈黙した静けさが支配している。「やすらぎにあってひとりであることは……」という時の、やすらぎはこの「やさしさ」に倚っているのである。宇宙的な理法に人が服従するときに、人間の關係は、静ひつとなり、平和となるというのである。この時にはじめて人は真の自由にあると言うことができる。ロレンスの次の言葉はこういう意味に解して意義が深いと思う。「人は宗教的な信念の何かしら深い内部の声に服するときに自由なのである。内部より服従すること」²⁷⁾

ロレンスの根本観念は客観的な識に覚醒するという点であった。主観的な茫洋たる世界に客観的識が埋没して、主客混迷していることが、社会に不幸をもたらす一つの大きな原因であると言える。それは脳髓的であり、ある意味での精神的、浪漫的な考え方から由来するものである。主観的に Sympathetic な態度は、却って人間の関係を枯らす危険を持つものであって、これを生々樹立することは不可能である。膝の上の無心の幼児を Objective に識ることが、母に豊かな所有感をもたらし、恍惚とした至福に浸ることを可能ならしめる。喜びと、悲しみと、この覚醒に深く根ざしていることによって、リアルな感情であり得る。すなわち稔り多い真の Communion は、リミットへの覚醒によって、はじめて可能であると言ふことができるであらう。

ロレンスはデモクラシーを論じたなかで、「いかなるものも他のものの Being を determine してはならない」と述べ、これがデモクラシーにとって第一の、大いなる目的であると言っている。「皮膚の中で全きもの」であることの真の価値は、その皮膚の中よりのり出して他者を determine せんとする不遜を決して犯かさない所にある。「人はおのづからに (spontaneously) におのれ自体であるべきこと」がデモクラシーの第一義であるとせば、他者のリミットへ侵入して決定を強要せんとすることは、おのれ自体を乱だすことであると共に、他者のおのれをも乱たす二重の罪を犯すこととなる。いかなるものも決定されざるもの、測り知れざるもの、神韻たる根元を存在に持つものという、客観的識に立つことが最も肝要なことである。

この識に静かに立つとき、平等、不平等などといった水平の問題はおのづと起り得ないことになる。このとき

人は垂直の線に立っているものであり、この垂直に自己を貫らぬくことによって、はじめて純正の謙虚なるものになり得るのである。これ以外に謙虚への道はありようはない。デモクラシーが近代に到ってますます陥入った不毛と病害の原因は、この謙虚の欠落や偽装に発していると言うことができる。水平の面に優越して行動するとき、侵寇、苛虐、不信などといった不遜が、人間の関係を頽廢させる危険を招来することは、歴史的な事例によっても明瞭なことである。

謙虚は何かしら偉大な理法に服従していることを意味する。ロレンスの言う「内部より従う」べきものは、宇宙的な理法であり天地を垂直に貫くものである。この理法への絶対的服従に目覚めることは、ロレンス風には宇宙の意識を取戻すことに外ならない。宇宙の理法そのもの、またそれへの服従は静かなるもの、黙せるものである。ひとは謙虚にこの宇宙的意識に覚醒するとき、静かにして沈黙せるおのれを見出し、識るであろう。この覚醒が Presence の覚醒であり、おのれと他者が相対する関係への覚醒であるとせば、人は静かにこの関係を生くることを識る。愛が沈黙と平和であることは、このいわば宇宙的な静けさがもたらすことに倚っている。この静けさを所有するときに人は真に自由であると呼ぶことができるであろう。

人は根元において静かなるもの、平和なるものであり、深奥の魂において沈黙せるものなのである。デモクラットの社会における性急な水平化が、人をして喧騒ならしめる。ロレンスは、ことに晩年に到ってこの沈黙の眞の価値を見出すことを、歪曲せる社会を正すために最も重要と考えたのである。彼は単なる原始的な自然主義でもなければ、宇宙主義者でもなかった。眞の愛のリアリティを識るためには、自然の観相と人間の存在への潜水によって啓示を得ることが肝要であると、彼は固く信じていたのである。一見彼の信念は反社会的、超絶的、あるいは天上的に見えても、彼は最も脚下の、手もとの、最も現実的な問題を提出しているのである。反デモクラッ

トドめいし真底にあらば真にレコンシットせられたと言ふことが出来るであらう。

- (1) Books Phoenix p. 732
- (2) *ibid* p. 733
- (3) Apocalypse Albatross Ed. chapt. II t. p. 50
- (4) Books p. 734
- (5) Apocalypse p. 213
- (6) Fantasia Compass Book p. 168
- (7) *ibid* p. 209
- (8) Democracy Phoenix p. 714
- (9) *ibid*. p. 715
- (10) Psychoanalysis & The Unconscious Compass Book p. 38
- (11) *ibid* p. 40
- (12) Letter to Brewster. 1922
- (13) The Man Who Died Tauchnitz Ed. p. 31
- (14) Letter to Brewster. 1927
- (15) Simone Weil: Enracinement p. 241
- (16) *ibid* p. 241
- (17) Apocalypse p. 183
- (18) *ibid* p. 184
- (19) Plumed Serpent Pocket Ed. p. 470
- (20) Letter to Brewster. 1922
- (21) ロンバードの *impatient* であることが云っている(例えばヘリオットが云っているように)。しかし彼の真底における辛抱
- (22) 強さをよく見なければならぬ。彼を理解する上はこのことは重要である。

- 22 The Man Who Died p. 13
- 23 ibid p. 31
- 24 Etruscan Places Phoenix Ed. p. 68
- 25 ロレンスの Tenderness の觀念については神奈川大学「人文研究」八号所載の拙文「晩年のロレンス」において論及した。471-472頁を註しては触れなうでおく。
- 26 Lady Chatterley p. 322
- 27 The Spirit of Place. Selected Literary Essays, edited by H. Moore p. 301
- 28 Democracy p. 716
- 29 ibid p. 716